

出前講座繁盛記

－水辺の生態系を守るために－

調査研究部 ○齋藤和久

本県では、平成 19 年度から身近な様々な環境問題に対する関心と理解を深めるため、出前講座を実施しており、特に水辺の生き物の出前講座は件数や参加人数も多いことから、参加者にとっては地域での実践活動のきっかけになっています。今後は、地域に密着して環境保全活動をコーディネートできる人材を増やすとともに、その取組を支援していく仕組みを一層充実させていくことが必要ではないかと考えています。

1 はじめに

本県では、様々な環境問題に対する県民の方の関心と理解を深め、環境保全活動に対する取組の推進や教育の場での理科離れの解消に向け、当センターのアウトリーチ活動の一環として、平成 19 年度から「出前講座」「出前授業」「出前技術支援」（以下、これらを総称して「出前講座」という。）を実施しています。当センターの出前講座は、地球温暖化をはじめとした地球規模の問題から身近な水辺の生き物まで多岐にわたっていますが、今回は、これまでに行ってきた出前講座の中でも要望が多い、水辺の生き物に関係した出前講座の状況、水辺の生き物観察会のポイントなどについて紹介します。

2 出前講座の意義とその取組

本県では、丹沢大山の森林の荒廃や市街化・開発などによる身近な水辺環境の悪化に伴う様々な生態系への影響が危惧されています。更に水域生態系では、絶滅が危惧される種の増加や外来種の脅威など生き物を取り巻く環境は厳しい状況にさらされています。そこで、当センターでは、このような課題に対して様々な面からの調査研究を実施しており、得られた結果を出前講座などで紹介していますが、出前講座をきっかけに参加された方々が地域の生態系に関心をもち、それぞれの地元で生態系の調査や環境保全活動などにつなげていただければと考えています。

当センターの出前講座の入門編の子供たちを対象にした「水辺の生き物講座」は、川や田んぼなど現場での採集と観察を主体にした生き物などに興味や関心を持ってもらうための観察会です。この出前講座を通し、さらに興味や関心を持ったことについて、自ら調べたい、学びたいという意欲を引き出すことができれば、出前講座の大きな成果と考えています。また、大人を対象にした実践編では、参加者が目的や思いを抱いている方が多いため、自らの実践や活動に必要な正しい基礎知識や専門的知識を吸収し、それをもとに、水辺生態系の調査や生態系を守るための行動

や実践に取り組んでいただきたいと思いますと考えています。

当センターでは、このような入門から専門的までの幅広い要望に応えているため、地域の生態系保全活動などを行おうと考えている初心者の方や実践されている団体の方は、是非出前講座や当センターの講習を受講していただきたいと思いますと考えています。

3 出前講座の状況

3. 1 講座全体の状況

平成 19～23 年度における出前講座の実施件数は、毎年 20～30 件です（平成 23 年度の未実施は含まず。）。このうち、水辺の生き物と温暖化の 2 講座が多くを占めています（図 1）。また、参加人数は累計で 5,900 人以上に達し、水辺の生き物と温暖化の 2 講座が多くを占めました。参加者の内訳は、小・中・高の生徒と大人がほぼ同じ割合を示し（図 2）、そのうち、依頼団体は、市民団体、学校及び市町村で大きな割合を占めており、意識の高さがうかがわれます。

3. 2 水辺の生き物講座の状況

水辺の生き物講座の実施件数は、毎年 10 件前後で、大人を対象とした件数が少なく、小学生が 2/3 を占めているのが特徴でした（図 3）。依頼団体は市民団体が最も多く、講座のほとんどは夏休みに集中し、座学が少なく、現地での観察会を主体にしていることも大きな特徴でした。参加人数は毎年 300～850 人でした。

4 なぜ水辺の生き物講座が多いのか？

水辺の生き物講座が多い理由は、人口が増加し、市街化の進行が著しい本県の地域特性から、身近な水辺の生き物に親しみたい、もっと知りたい、自ら身近な生き物や環境を調査したいという要望が強くなっていることが考えられます。また、大人たちにとっても次世代の子供たちに身近な自然を残したいとい

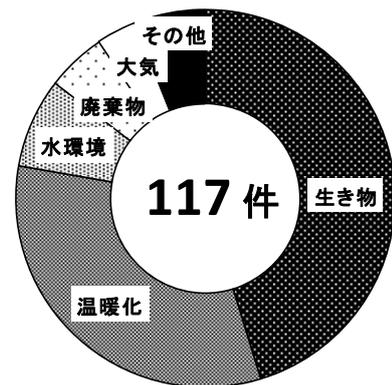


図1 実施件数の内訳
(平成19～23年度)

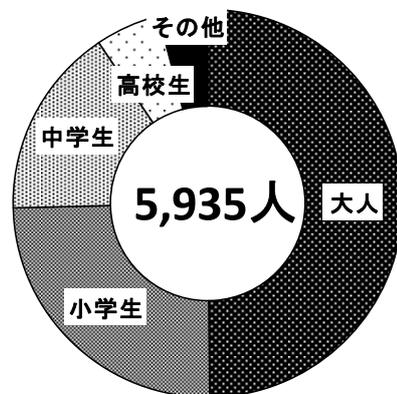


図2 参加者の内訳
(平成19～23年度)

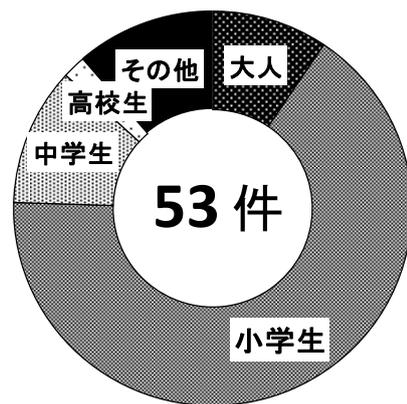


図3 水辺の生き物講座の対象者別件数(平成19～23年度)

う気持ちや、子供たちが身近な生き物にふれる機会が少なくなったことを実感しているためと思われます。更に出前講座の制度が始まった平成19年度に「田んぼの生きものウォッチング」を作成して（図4）、公表したことも大きな理由と考えられます。

5 観察会の進め方

5.1 楽しい観察会とそのための工夫

観察会では、生き物に興味を持ってもらうことが重要ですが、楽しくなければ興味もわいてきません。そこで、採集では生き物が隠れているような場所となぜそこを好むのかを説明したり、生き物を手でふれ、敏捷さやエビ・カニの甲殻の感触を実感できるコーナーを設置したりします。また、生き物の説明をする場合には、一方的に話すだけでなく対話しながら進めていきます。最後にアンケートを行い、もっと知りたい、調べたいという声が多ければ大成功です。

観察会は、生息する生き物全てが対象になりますが、テーマを決めた観察会、例えばカワニナを探してみようというテーマや、生き物の活動が少ない秋から冬に行くこと、例えば夏にいた多くの生き物はどこにいったのかというテーマも新たな発見があり楽しいかもしれません。

5.2 観察会進め方のポイント

観察会などで気がついたことや進め方のポイントについて紹介します。

- ① 現地での観察会は、少人数が理想です（できれば10名以内）。これは、一人ひとりと対話をするところをはじめ、参加者の安全面や生息する生き物の環境を守るためにも必要です。
- ② 夏の開催が多いので、開催場所の選定には注意が必要です。これは、日陰をできるだけ確保し、熱中症対策や体調管理を行うためや、急な降雨で増水による事故防止のためにも必要です。
- ③ 採集の前に、まずは観察です。これは、川に入り採集する前に、橋の上や岸から周辺環境や水中の生き物を観察します（図5）。その後、箱メガネで水中の生き物を観察したのち（図6）、川の中に入り採集します。
- ④ 水の中に手を入れてみます。



図4 田んぼの生きものウォッチング



図5 岸からの観察

夏の水温は20～27℃ですので、体温との温度差に気がつきます。魚類などは、水温が体温ですから、手で長時間触ると火傷をしてしまいます。

- ⑤ 魚類などの大きな生き物に目がいきますが、石の裏や水草の中などにいる小さな生き物にも目を向けてみます。
- ⑥ この水はどこから流れてきたのか調べてみます。田んぼの用水路の水は、思いがけないところから流れてきていることもあります。
- ⑦ 調査結果を記録します。採集した生き物や採集した場所の環境を記録しておきます。
- ⑧ 調査した河川や地元の生き物シート（図鑑）を作成してみます。採集した生き物の記録から、その水域の生き物のシート（図鑑）を作成し（図7）、観察会では、これを用いて行うことができます。
- ⑨ 地域の仲間を増やします。観察会に参加した小学生が中学生、高校生になり、観察会をサポートする地域の「輪」づくりへと広がっていきます。



図6 箱メガネによる観察



図7 市民団体が作成した生き物シート

6 今後の出前講座の進め方

当センターでは、現在の水辺の生き物講座では、生き物を採集し、名前を調べるとともに、その生息状況や地域の生き物の数などから周辺の環境との関わりについて、関心と理解を深めることを目的に行ってきています。当センターでも出前講座で得られた生き物の生息状況は貴重な情報となりますが、県内の河川は調査が十分に行われていない場所も多いので、参加された方が身近な水辺の生き物調査を継続的に実施すれば、そこに新たな生き物の生息状況が発見できるかも知れません。

地域の生き物と環境に関心と理解を更に深めるためには、地域に密着した継続的な観察会が行われることが望ましいと考えています。そのためには、当センターとしては、地域の環境コーディネーターの育成を積極的に行い、あわせて、技術相談や調査機材の貸し出しなどで支援する仕組みを一層充実させていくことが必要ではないかと考えています。